

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月22日現在

機関番号：32639

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21700721

研究課題名（和文）幼児期の子ども同士の模倣の分析による仲間関係の探究

研究課題名（英文）Analyzing the formation of peer groups in kindergarten as a result of the development of peer imitation

研究代表者

岩田 恵子（IWATA KEIKO）

玉川大学・教育学部・准教授

研究者番号：80287812

研究成果の概要（和文）：幼稚園における自由遊び場面において仲間集団がどのように形成されるかを、幼児同士の模倣に注目して分析した。仲間集団内で模倣が意図的に行われ始めると、同じ集団ではない相手を排除するような行為も生じていた。これは社会的不確実性の中で小さな共通点により安心できる場の形成を試みるゆえに、排除行為が構成されていると考察された。仲間集団の形成は、集団のダイナミクスと相互構成的に行為の意味をよみとり、保育に活かす必要が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to analyze how peer groups were formed during free play in kindergarten as a result of the development of peer imitation in children. When the children started imitating each other intentionally, peer groups started forming by excluding those who were not performing actions that were the same as the rest of the group. Children formed small groups that had certain features, developing “assurance” relationships when they were uncertain in a social situation; however, these assurance relationship groups “excluded” members if they did not have certain characteristics that were common with the group. The study suggests that the formation of peer groups in kindergarten need to be analyzed by studying not only the children’s skill but also the social dynamics of these groups.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：保育学・発達心理学

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：教育系心理学、模倣、幼児、仲間関係、他者理解

1. 研究開始当初の背景

保育の場において子どもたちが同年代の仲間と関係を築き「ともだち」となっていくことは、ごく素朴にあたりまえのこととしてと

らえられていることが多い。筆者自身も疑問を持たず「ともだち」「なかよし」とみられる子ども達を研究の対象としてきた。しかし、幼児の遊ぶ姿をみる機会を深めるうちに、

「ともだち」や「なかよし」ととらえられる関係は楽しいばかりではなく、悲しみや怒りなども含んだ複雑な関係であることがみえてきた。そして、「なかよし」という関係を、筆者は無意識に肯定的な側面でしか捉えておらず、葛藤的な側面をみてこなかったことに気づかされた。大人はもちろん幼児自身も「なかよし」であることを大切なことであるととらえ、その関係に含まれる葛藤的な側面は見逃されがちである。そこで「なかよし」の両義性に注目しながら幼稚園における仲間関係の発達を検討していく必要性を感じていた。

さらに、本研究においては、このような「なかよし」が基盤となる幼稚園文化に子どもたちが参加していくプロセスを検討するにあたって、「模倣」という行為を参照点とすることとした。先行研究において、仲間とのやりとりのはじまりについては、直接声をかけあっていないくとも、よくみると相手がやっていることをみて自分も真似をするという「同調」「模倣」「共振」が大きな役割を果たしていることが指摘されていた。特に「模倣」に関しては近年、脳科学におけるミラーニューロンの発見や乳児期の実験的研究、自閉症児を対象とした研究など多角的に研究知見が蓄積されてきており、他者と関係を築きながら生活する上で重要な役割を果たすものとして注目され、他者を理解するプロセスとも極めて関係が深い。保育現場及び実験的研究からとらえられ始めている子ども同士の「模倣」という現象に注目することにより、従来、量的な研究や友人関係の源を個人の能力に帰属する研究が主であった仲間関係の形成プロセスを关系的な視点からとらえなおすことが可能であると考えられた。

そこで、本研究においては、子ども同士の模倣がどのように変容していくかを質的に分析し、保育における幼児理解を深め、保育現場の示唆を得ることを目指すこととした。

2. 研究の目的

幼児期の子ども同士の模倣を下記の観点から分析し、保育の場における発達をとらえる視点を検討することを目的とした。

(1) 幼稚園での「模倣」とみられるエピソードの分析を行い仲間関係の発達をとらえること。

(2) 幼児期の仲間関係の変容と幼児の他者理解を「模倣」を通してとらえること。

(3) 保育者・保護者とのコミュニケーションに寄与する幼児理解の方法を探ること。

3. 研究の方法

「模倣」という現象に限らず、保育の場で生じていることを关系的に描き出すためには、一定の子どもたちの一定の行為だけに焦点化した観察ではなく、まわりの子どもたちのやりとり、遊び、保育者の関わり、保護者のかかわりなど、広い視点から関係の網の目を描き出す必要がある。この営みの中では、保育現場の当事者と研究者との関係のありかた、研究者自身のものの見方などの見直しが必要となる。本研究では、このような研究者自身のものの見方を再検討しながら3年保育の私立幼稚園にてフィールドワークをおこない、その記録の分析を行った。また、このような記述の補助記録、他の分析の手段とするため、許可の得られているビデオカメラでの撮影も行った。さらに、保育者とエピソード記録やビデオ映像記録をもとに話し合う機会を設けることにより、幼児期の仲間関係の発達を支える保育についての理解を深めた。

これらの記録から、子ども同士の模倣がみられるエピソードを抽出し、模倣のありかた、仲間関係のありかた、他者理解のありかたの相互的な発達プロセスの検討を行った。

4. 研究成果

(1) 模倣の果たす役割：関係を築く

仲間関係のはじまりである幼稚園の入園期に注目したエピソードの分析を行った。

その結果、遊びの中で子ども同士が無意識に共振的に同じ動きをしている模倣、相互模倣、少し年上の他者を後追い模倣していく模倣の3つのかたちがみられた。下記に後追い模倣のエピソードをあげる。

朝、登園してきたときには泣いていたM(女児)がS(女児)と一緒に遊んでいる様子が目に入る。Mが明らかにSの真似をしているようにみえる。Sがズボンをたくしあげて走ると、Mも同じようにズボンをたくしあげて走っていく。また、Sがたらいに片足を入れると、Mも同じようにたらいに片足を入れる。Sが砂場のポールへ飛びつくとMも飛びつく。SがジャンプすればMもジャンプする。SがしゃがむとMもしゃがむ。あちこち移動しながらの出来事なので、ふたりの距離が少しあくこともあるのだが、そのようなときに、Sが「M ちゃ〜ん」と呼んでいる声が聞こえてくる。また、MもちよとしたタイミングでSを見失ったときは、周囲を見回して一生懸命Sの姿を探している様子がみられる。

このエピソードは、入園後よく泣いていたMが、幼稚園で自らの遊びを見出し共に遊ぶことに参加していくプロセスと重なっている。真似してみたい特定の仲間と出会い、そ

の行為の真似をすることからMの幼稚園での遊びは始まっていた。子どもが自ら「模倣したくなる」と同時に「模倣できる」対象を求めていることが Vygotsky の言う主観的 ZPD を構成していることを Chaiklin (2003) が論じているように、模倣が、相手との水平的な関係と垂直的な関係の網の目の中で、自分自身の位置を見出していく現われとして考察された。すなわち、模倣は幼児が仲間関係を築き、発達していく際に重要な鍵となることが明らかにされた。

(2) 幼稚園での模倣が果たすもうひとつの役割：仲間の排除

模倣には、従来指摘されていたような親密な関係を作り出す機能と同時に、排除を作り出す、親密ではない関係の境界線を作り出す側面があることが明らかにされた。

女兒Mを中心とする年少2学期から3学期にかけてのかかわりの概略を下記に記す。

MとTで、相互に模倣しあい、ふり遊びのテーマを共有し楽しんでいる様子がみられることが多くなった。MとSとの間の模倣も、以前のようなMがSを一方向的に真似るだけではない、相互に模倣することがみられることも増えてきた。1学期には何度かみられたM、S、Tの3人で遊ぶ関係は、この時期、なかなかみられなくなっていた。

年少の初めの時期は、共振的な模倣や同調的な行為によって、ともに遊ぶことが成り立ちやすく、楽しい遊びが発見されると参加人数も大勢となる場面が多くみられた。ところが、ともに遊ぶ仲間がだんだん固定化してくるとともに、2者の関係が強まり、そこへ第3者が加わるのが難しいエピソードが増加した。そこでは、模倣は強まった2者の関係を維持する共に遊ぶための機能を果たしている。そして、そのように相互模倣する2者関係には第3者が入りにくくなっていくことが示された。次に年中になってからの様子を示す。

クラス替えもあり、MとSが同じクラス、Tがもうひとつのクラスとなった。遊ぶ時間にクラスの間壁はないのだが、MとSの2人で遊ぶ場面をみかけることが多くなり、TはHと過ごすことが多くなった。

このそれぞれの2者関係の中での相互模倣は引き続きみることができた。一方で、一緒に過ごすことの多い2人が第3者には「まねしないで」と模倣を拒んだり、さらには自分たちが同じ行為を互いに行ってみせながら、他者に自分たちの関係を誇示したりするような様子がみられた。

以上のように、従来の研究で仲間とのやりとりを支える側面が見出されていた「模倣」は、その機能とともに、他の仲間を「排除」するはたらきをすることもあることが考えられた。特に2者関係の強まりと他との関係を拒否する状況は、Dunn(2004)によって指摘されている2人から3人の関係になることの難しさと重なり、検討する必要性が指摘された。

(3) 仲間関係の固定化とそこにみられる特徴的な模倣：トークン化模倣

幼稚園の中での模倣は、入園当初の無意識の共振的な模倣に加わる形で、意図的な模倣が多くみられるように変化していた。そして、意図的な模倣の中には、次のように一緒に遊んでいる仲間に関係する自分のおりにしてもらい、ただ仲間であることの確認を繰り返して遊びが広がることにはなかなかつながらなくなっているものがみられた。

1階の玄関での出来事。年中児男児G、S、Y、Aの姿がある。Sがしきりに「♪こんどうちにとまりたいひと、このゆびとまれ、は～やくしないと、でんきがきえる」と節回しのついた言葉を何度も繰り返している。Sは一度フレーズがおわっても、YとGがSの指にとまるまで、同じ節回しを繰り返している。さらには、YやGにも同じように「♪こんどうちにとまりたいひと、このゆびとまれ、は～やくしないと、でんきがきえる」と言うように促す。YとGもそれぞれ応じて同じことをしている。

このエピソードは年中児男児の10月の一場面である。「♪このゆびとまれ」という言葉が実際の遊び始めるための方法というよりは、既に一緒に遊んでいる仲間を確認するために使われ、それを模倣することが意図的になされている。それはあたかも仲間であることを確認する作業であり、模倣と一緒に遊ぶことを成り立たせているというよりは、自分たちが仲間であることを確認に使われていた。

このような模倣をさらに仲間づくりにおいて仲間集団と仲間ではない子どもとの境界線で行われる「仲間入り」場面に注目して分析したところ、模倣がその意味を失い、仲間の確認にのみ用いられる「トークン化」模倣と名付けた現象が明らかにされた。

(4) 仲間関係の固定化の生成原理のメカニズムと固定化からの解放のプロセスの考察

仲間関係が固定化するとともに、模倣がト

ークン化するという現象がなぜみられるのかについて、仲間づくりの生成原理の考察を行った。この考察に際しては、内集団ひいきという、集団間関係における包有と排除を象徴する場面を軸に、子どもたちが仲間との「安心」を求め、他を排除する現象が生じるかのメカニズムの理論的探求を行った。

山岸 (1997) によれば、集団が内集団内で相互互恵的にかかわり、集団外を排除するという「内集団ひいき」において、排除は他者を異なるものとして排除するために生じるのではなく、社会的不確実性のもとで生み出されることとしている。すなわち、不確実性の社会では、些細ではあっても共通点をもつこと、共通したやりとりを交換できることを相互確認し、その共通したやりとりを交換する以外の関係を結果的に排除することが生まれるのだとしている。「トークン化模倣」は、そのような社会的関係状況の下で生まれる、不確実性への対応行為と解釈された。

そのことを考察した上で、誰かと一緒に遊ぶことを最優先課題として包有関係をつくる「安心」志向から、他者と意図のすりあわせを経て一緒に遊べるか否かを見極めることを優先する「信頼」関係の構築への道筋を、「同調」(一緒に遊ぶこと)の意図の確認から協調内容(行為の目的や満たすべき欲求)への意図理解という、「心の理論」の発達をベースとしたエピソードから検討した。

その結果、仲間づくりにおいて排除は否定的な側面が注目されがちであるが、「排除」から生まれる「拒否」を経験することが、同調行為より意図の共有を優先することや、その意図の違いを相互に表明してつき合わせることの重要性に気づくきっかけとなることを考察した。子どもが排除の中でも自分の思いを表現し、その上でお互いに理解し、包有と排除の境界線がゆらぐことが重要であり、それはおとなも含めて幼稚園という場全体が「信頼」社会を求め、作り出そうとする営みに向かうことが重要であることが示唆された。「信頼」社会は決して葛藤がないものではなく、お互いが異なることをきちんとあらわし、理解しあえることが可能な状況を作り出すことが大切であると考えられた。

以上のような本研究の結果から、幼児の仲間づくりについては「誰かと一緒に遊んでいる」ということだけを確認して、「仲良くしている」と安心していても、その「一緒に遊ぶ」が排除を生み出し、さらに互いの意図の確認から離れて「同調」のみを志向していることもあることが示唆された。そのような場合は、どこかでそのような「同調」志向から、相手の意図とのすりあわせによる「協調」に向かう可能性をふまえて見守り、それへの志向のはじまりをみつけて支援するというこ

とも大切となる。また、その際、幼児同士の「いざこざ」が、それまで「同調」をベースとした仲間づくりから、互いの違いを認めた上での関係づくり、つまり、相互の人間理解にもとづく信頼関係の構築にむかうという過渡的プロセスであるとする必要が示唆された。つまり、ただ親密な関係の育ちを支えたり、もしくは仲良くしなければならぬような制約やルールを作ったりするだけでは信頼からなる協同的な仲間集団の形成は難しいことに留意する必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 岩田恵子、幼稚園における仲間づくり：「安心」関係から「信頼」関係を築く道筋の探究、保育学研究、査読有、49 巻、2011、157-167、
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008799404>
- ② 岩田恵子、模倣の発達の観点からみる幼児期の仲間集団の形成、青山社会情報研究、査読有、2 巻、2010、31-40、
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008431824>

[学会発表] (計 5 件)

- ① Iwata, K. The formation of peer groups in line with imitation development in kindergarten. Proc. of International Society for Cultural and Activity Research (ISCAR2011). (2011.9.8). (イタリア・ローマ)
- ② 岩田恵子、模倣のありかたを通してみる幼児期の仲間集団の変容. 日本発達心理学会第 22 回大会発表論文集, 469. (2011.3.26). (東京都・東京学芸大学)
- ③ 岩田恵子、幼児の二者から三者関係の遊びへの変化における模倣の果たす役割. 日本保育学会第 63 回大会発表要旨集, p.620. (2010.5.23). (愛媛県・松山東雲女子大学)
- ④ 岩田恵子、遊びの中で仲間を模倣することの意味. 日本発達心理学会第 21 回大会発表論文集, p558. (2010.3.28). (兵庫県・神戸国際会議場)
- ⑤ 岩田恵子、幼稚園において子どもが他児の動きを模倣することの意味. 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, p218. (2009.9.20). (静岡県・静岡大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 恵子 (IWATA KEIKO)

玉川大学・教育学部・准教授
研究者番号：80287812